

元朗

香港の原風景を探して

特集 | 南信之 [文・写真]
text & photo : Minami Nobuyuki

元朗は、香港が「香港」と呼ばれ始めるずっと前から街として栄えていた。新界地区が英国に租借されたのは1898年のことだが、その後も長い間、元朗の人々は、「元朗は元朗、香港は香港」という感覚を持ち続け、香港への帰属感は薄かったという。つい20年ほど前までは例えば元朗の誰かが香港都心に職を得た場合など、「香港に出稼ぎに行く」という気分だったそうだ。

戦後、元朗は急速に発展する都市・香港を眺めながら、置いてきぼりをくわされた形になったが、80年代に入ると都市部の人工増加からこの地区でも大規模な団地開発が進められる。住宅開発と並行して香港市街とを結ぶ幹線道路が敷設され、元朗も香港の通勤圏に入った。この頃ようやく「香港の元朗」という意識になったのだという。

私が最後に元朗を訪れたのは、確か香港が中国に返還される3年ほど前だった。当時はまだ香港島や九龍の市街地に比べるとずいぶんんびりしていたように思う。久しぶりに見る元朗の街の様子は、ずいぶんと変わっていた。大通りの古い商店の建物は消えつせ、歩道の混雑は香港の繁華街と比べても大差はなく、もっとも「のんびり」などという形容は使えなくなってしまう。

しかし、今も街の中心からほんの少し



錦田河の渡し船

離れると、そこにはイギリス人到来以前から変わらないもの、例えば野鳥の潜む湿地、線香の煙りが立ちこめる古廟、城壁に囲まれた村々など、香港の原風景ともいふべきこの土地の貌かたちと人々の営みを見つけることができる。

屏山

ジャラジャラと牌をかき混ぜる音が巷ちまたに響く。道端に生えた樹の下で村人たちがマージャンに興じていた。「村に来た」という気分になる。

元朗市街から西に数キロの屏山一帯には明、清朝時代の建物が多く残っている。北圍、錦田など元朗地区の村の多くがそうであるように、屏山にある村々も鄧一族によって開拓された。

12世紀に広州の官吏だった鄧符協が退官後にこの地に移り住んだのを皮切りに、一族郎党が集まり一大勢力となったという。今でもこの辺りの住民の多くが鄧姓を持つ。もし村の中で、鄧さんと大声で叫んだらどうなるか。たぶん、俺のことではないだろう、と思われて鄧さんたちから無視される。

屏山には、天文学に長けたという唐代の官吏・洪熙が祭られる、洪聖宮、接客の場として、また夏季には村人の休憩所としても使われたという、清暑軒、鄧一



族の私塾「觀廷書室」、どちらも一族の先祖が祭られる、^H「氏宗祠」と「愈喬二公祠」などがある。

煉瓦塀の村

800年前に掘られたという古井戸を過ぎると、「上璋圍」という名の煉瓦塀に囲まれた村の前に出る。日本語で「城壁村」とよばれる観光地として有名な錦田の吉慶圍などに比べて規模が小さく、村といつより屏に囲まれたお屋敷といった風である。

煉瓦塀に囲まれた村がある、あるいは過去にあった場所には、たいてい地名に「圍」がついている。香港には圍の字がつく地名が各地にあるが、現在も塀が残っているところは数えるほどしかない。塀は当然、防衛のために築かれたものであるから、当時の治安はかなり悪かったと想像できる。

村の入り口で入ってよいものかと躊躇ちゆうちゆうしている、住民が「入れ」と手招きしてくれた。煉瓦塀で囲まれているにもかかわらず、狭い路地にはよく風が通る。寄りそうように建っている家々のほとんどはコンクリート造りの平屋だが、なかには清朝以前のものと思われる石造りや煉瓦造りの古い家屋も残っている。

村の中央部にある共同の洗い場では

おばちゃんたちが井戸端会議を開いていた。

星を聚あめる塔

村の外れに三重の石塔が建っている。600年前に建てられた時には7層だったが、再建の際に規模が縮小されて3層になってしまったのだという。

それにしても、「聚星楼、星を聚める塔」とは、なんと美しい名だろう。草原に立つ塔はさんざめく星の光をあつめて、凛々しく浮かび上がり… と思ったのは、私の早とちりだったようだ。

聚星楼という名は、塔に天空におわす学問の神、魁星一般には北斗七星の第一の星」と、科挙の試験に受かって役人に召しかかえられた一族の者たちが祭られていることから付けられた。なぜ科挙の合格者が星なのか。科挙でトップの成績を取めた者は、状元と呼ばれたが、そもそも状元とは魁星が地上に遣わした家来の名にあやかっただもの。だから科挙の合格者もお星様なのだ。

日ごろは訪れる者の少ないこの塔に、入学試験のシーズンになると塔に祭られる秀才たちにあやかろうと、多くの受験生が参拝にやってくるという。

現在、塔の周辺には高層住宅が立ち並び、すくそびで鉄道用の高架建設も進め



右頁
 【上】上璋園の石垣
 【右】朝廷書室内の扉
 【中】鄧氏宗祠は老人たちの憩いの場
 【左】鄧氏宗祠内の先祖を祭った祭壇
 左頁
 【右上】学問の神と秀才が祭られる聚星楼
 【左上】元朗と屯門間を走る軽便鉄路



られている。
 かつて人々が畏敬の念を持って見上げたであろう聚星楼が、今や林立する高層アパートの部屋の窓から逆に人々によって見下ろされている。

老舗の味

屏山から元朗行きの軽便鉄路（鉄道）に乗る。鉄道といっても1両か2両編成で、赤信号には車と同じようにちゃんと停車もするのでどちらかというと路面電車に近い。走りはスムーズで速度もかなり出る。近代的なチンチン電車といった感じだ。香港島を走る純然たる路面電車の方はチンチンという鐘の音は街の騒音にかき消されて聴えないという理由で、警鐘はすいぶん前に味気のないブザーに替えられてしまった。逆にこちらの近代的な路面電車もどきの方は、今も昔ながらにチンチンと愛敬のある鐘の音を響かせて走る。

元朗には老舗が多い。老舗といっても、実はほんとうに古くから続いている店はほとんどないのだが、歴史の浅い香港では、「元朗は歴史ある街」とのイメージが強く、「元朗の老舗」というと説得力があるらしい。

「老婆餅」とはそんな老舗の菓子屋 恒香

餅家」のオリジナル商品である。老婆餅といっても別に婆さんがつくっているのではない。中国南部で老婆は、「うちの女房」という意味で、20歳の新妻でも老婆である。亭主が奥さんを呼ぶときに使う「ダーリン」と言った感じになる。つまり老婆餅は愛妻餅というわけだ。ところで中国語の「餅」は一般に穀物の粉を焼いて作った食べ物のごとで、日本の餅の方は「日本年糕」などといわれる。

老婆餅の皮はパイのようにぱりぱりで、中には冬瓜で作った半透明の白餡が入っている。餡はもちもちしていてゼリーのようなものである。甘さが抑えられた上品な味なのだが、かじると皮がぼろぼろと散らばるので行儀良く食べるのはかなり難しい。お土産に持ち帰るときにも崩れないように気をつけなければいけない。

菓子屋といえば、月餅で有名な「栄華」も元朗の老舗だが、こちらはアジア各国のみならず欧米のチャイナタウンにまで



元朗名物の老婆餅

右頁
【右】長盛街の北帝廟
【左】元朗舊墟の雜貨屋

左頁
【右】南生園の家々
【左】野鳥の潜む湿地



「蝦子撈麵は旨いよ。これにしな！」

と、そば屋のオバチャン。

気迫に押されて、蝦子撈麵を注文すると、あつという間に湯気がたつ汁無しソバがテーブルに運ばれてきた。注文する前から麵をゆでていたとしか思えない速さであった。

つす黄色い麵の上に刻みネギと茶色っぽい粒々が振りかけられている。粒々が蝦子。子供の蝦ではなく蝦の卵を乾燥させたものだ。蝦子の磯の香りとフチフチ

はいけない。蝦子の瓶詰め「金装蝦子」を土産に買って店を出る。

店の前の通りを歩いていると騒音に混じって燕の鳴き声のような音が聴こえてきた。一瞬、気のせいだと思ったが、歩道には白い鳥の糞のようなものがたくさん落ちていた。頭上を見上げると、商店の軒に燕の巣がいくつもかかっていた。繁華街に燕の巣。元朗がつい最近まで田舎町だったことの証拠を見つけた気がして妙に愉快な気持ちになる。

元朗舊墟

元朗のバスターミナルの向こう側は工事でほり返されていたが、その向こうに古い家々の屋根が見えた。村がまだ残っていたことがわかって安堵する。

20世紀初めまでは「元朗舊墟」と呼ばれるこの界隈が元朗の中心だった。

舊墟の中心を通る「長盛街」は現在の感覚では路地にしか見えないだが、その昔は元朗きつての目抜き通りであった。それを証明するかのように、300年前に創業された香港最初の質屋といわれる「普源押」の建物が通りの中ほどに残っている。玄関は板と太い丸太格子の二重扉になっている。華南の夏はむし暑い。しかし、風を通すために扉を開けたままに

チーン展開して中華世界の国際ブランドとなったために、かえって、元朗の老舗とのイメージは薄れてしまった。

一方、恒香の方は今でも元朗の口カルフランドのままで、「元朗へいつたら恒香の老婆餅」ということになっている。実は老婆餅の方も香港中どこでも買うことができただが……。

老舗のそば屋、「好到底麵家」に入る。こちら香港に乾麵を売る店を何軒か出しているが、そば屋として営業しているのは今でもこの本店だけのはずだ。年季の入った椅子に腰掛けるや、

した食感が麵によく合って実にうまい。麵をすすりながら品書きを見ていると、「蝦子撈麵」が一番初めに記されている。29香港ドル(約500円)なり。具は蝦子少々と刻みネギだけ、麵の量もかなり少ないのに、ちよつと高すぎじゃないかと思つたが、半端な時刻なのに店はかなり込んでいた。しかし、よく見ると地元子らしき客たちはフンタン麵などを食べており、こちらは相場の値段段であった。蝦子撈麵を食べているのは私だけ。まあ、「よそ者」が好到底麵家に来たら、蝦子撈麵を注文するのは掟のようなもので、老舗存続のためにもこれに逆らつて



しておいたのでは物騒だ。そこで、板戸だけ開けて格子戸は閉めておく。風は通すが、泥棒は防げるというわけだ。

昔ながらの雑貨屋、通りにテーブルを並べた大衆食堂、北帝（二帝）廟で焚かれた線香の匂いが路地に漂ってくる。

錦田河の渡し船

「おい、渡ししてくれ〜」

錦田河の向こう岸にむかって大声で叫ぶ。3度ばかり叫んだところで、やっと船頭とおぼしきオッサンが頭を掻き掻き棧橋に現れた。

手こぎの船がふらふらとこちらに近づいて来る。昼寝の邪魔でもしてしまつたのだからか、船頭はムヌとしていた。運賃箱代わりのポリバケツに運賃3ドルを投げ入れると、

「5ドルだ」という。

『舊墟の売店のオパチャンに3ドルと聞いたけどな』と思いつつ、もう2ドルほりり込む。船頭は一人だけだという。いたい一日何人がこの河を渡るのだらう。『宅地開発で河に橋を架けるので渡し舟も今年が最後』といったつわさが今までに何度か流れたが、この不景気なら当分は大丈夫そうだ。

川の水は真つ黒で深さなどわからな

い。ドブの匂いが鼻を突く。河幅は20メー

トル足らずなので、すぐに対岸の「南生園」に着いてしまつた。

南生園の「園」の字の由来は、かつてここに城壁村があったという説と、堤で囲まれた潟だからだという説がある。

川辺に粗末な家屋が何軒がある以外に建物はない。マンガやバナナの木々が青い実をたわわにつけていた。家々を通り抜るとその先には一面に池が広がっている。もともと潟だらたところをせき止めて池にしたもので、香港の食卓によく上る淡水魚の養殖が行われている。堤で草刈をする老婆は裸足に編み笠といいでたちであった。今どき香港でまだこんな生活が営まれていることに驚きを感じずにはいられない。

川沿いの並木道を左に歩いてみる。右手には雑草の生い茂る湿地が遠くまで続く。ここから4キロ北の米埔は野鳥保護区になっている。灰色のゴイサギの群れ、干潟の向こうに沈む赤茶けた夕陽、犬たちの遠ぼえ、香港のイメージとかけ離れた寂寥感が漂う。

来た道を引き返し再び渡し船で河を渡つたころには、そろそろ街にネオンが灯りはじめる時間になっていた。私と入れ替わりに婆さんを一人乗せると、船頭はゆっくりと対岸へ向かって船をこぎ始める。夕暮れの光のなかで、小舟は時を渡る装置のように見えた。

HOW TO GO



元朗への行き方

香港島の天后から968番のバスで、銅鑼湾、中環経由で所要約1時間。

尖沙咀のネーザンロードから269Bのバスで、所要約45分。

元朗舊墟は軽便鉄路元朗ターミナル北側の朗日路を横断後、道路工事現場を抜けて西側に100メートル行ったところ。錦田河の渡し舟乗場は元朗舊墟の北端から400メートルほど北にある。

屏山への行き方

軽便鉄路で、元朗ターミナルから5つめの駅が屏山。所要8分。屏山駅下車後、屏厦路を北西方向に歩く。洪聖宮まで徒歩5分。聚星楼まで徒歩20分。